
静謐の彼方より

幾崎炉工

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静謐の彼方より

【Nコード】

N5087BA

【作者名】

幾崎炉工

【あらすじ】

大晦日、彼は静寂とともにあった。

彼が目を覚ましたのは、既に日が昇って久しい、昼時を過ぎた時分だった。

下宿の二階の角部屋の中央で寝癖ばかりの頭をひとしきり搔いてみてから肌に伝わってきた寒さに身を縮めると、彼はまた掛布団を被った。睡魔が去りやらぬ頭に昨晚見たらしい予報の画像が浮かび上がる。記憶が正しいなら今日は今冬最も冷え込む日らしい。まどろんだ瞳で室内温度も表示する時計に目をやると数字は一桁しかなく、彼はため息をつくと布団を頭からかぶった。

静寂に満ちた室内は彼の呼吸音だけが流れている。他の誰の生活音もない。

大学に通い始めて初めての年越しは目前に迫っており、それに期を合わせて彼以外に下宿に住む者は全て実家へと帰省した。本来なら彼自身もそうするつもりだったが、あいにくこの土地は実家から随分と離れている。三週間足らずの為に帰省するには勿体ない金額が往復にかかり、夏に帰省したことも相まってこの決断をせざるを得なかった。

旅立つたぬくもりが、毛布を通じて帰ってくる。

もぞ、と彼は一つ動いてみる。静謐の向こうから耳鳴りが迫る。そのような時、彼は決まってその耳鳴りに耳を澄ましていた。すると気づいた頃には眠りに落ちて、起きた頃には耳鳴りのことなど忘れていたのだ。だから決まってそのことを思い出すのは、こうして眠りに落ちる直前であった。

いつものようにそれをしようとしたが、彼は数瞬考えてからやめた。今年最後の日くらい、何かした方が良いのではと考えたからである。

掛布団を毛布もるとも跳ね飛ばす。一気に寒さが駆け抜けるが、すぐさま着替え等を引っ掴み洗面器に突っ込むと、部屋を出て逃げ

るように風呂場へと向かう。

やはり誰もいないのである。本来誰も入らないような時間であることに変わりはないが、それでも風呂には誰もいなかった。電灯をつけて寒さに耐えながら服を脱ぎ、浴室の戸を引き開けた。

途端、天井に張り付いていた滴が、彼の肩に落ちる。

跳ねるように身を震わすと、すぐにしゃがみこみ湯船のふたを開けた。むわりとした湯気が一気に溢れ出す。乾燥していた空気が一転、湿気を帯びたものと変わる。

いつでも入れるよう湯船には常に高めの温度に設定された湯が張られている。何人もが一日に入るそれをいつ洗っているのかは知らない。が、冷え切った体にはどうでもよかった。洗面器で湯を掬いながら後ろ手に扉を閉め、湯を体にかけた。

凍ったように冷たかった肌がひりひりと痛んだ。熱が体を包む。

彼はためらわずに二回、三回と繰り返した。肩の周りはそれでぬくもりを覚えたが、足先は冷え過ぎていたせいで感覚がない。仕方なしに彼は油にまみれた髪を洗い始める。鬱陶しさを覚えながら二三次度洗い、次に感覚のない足先を殊に丁寧にしながら体を洗い、それから顔を洗い、髭を剃り、そしてまた顔を洗った。

全て洗い終わると彼は立ち上がる。足先はまだどこか遠くにあるような感覚が残っている。その足をあげて湯船の淵をまたいで湯につかるが、その熱はなかなか伝わってこない。つま先、くるぶし、脛、膝ときてやっと熱を覚える。肩まで浸かってしまうと緊張感が押し出されるように、湯船からは湯が漏れた。普段ならその音にさえ気遣うのだが、今日ばかりは誰もいないのでしなくともよい。ほぐれていく足先の感覚とともに、彼は自分の境界が揺らいでいくのを感じた。

湯の漏れる音ばかりが浴室に満ちていた。時折天井から落ちる滴が湯船に落ちて水面に波紋を作る。覗き込んだ彼の瞳に水中の彼の裸体と水面に映った彼の顔とが見える。また一つ滴が落ちて波紋を作り、水面に映る彼の顔を乱した。歪んだ笑みにも見えて、一人そ

れを真似てみると自嘲気味な笑みが生まれた。熱が体に染みてくるのと同じ速度で、彼は瞼を閉じていく。

水の流れる音がする。先ほど湯船から漏れた湯が排水溝を伝う音だろうか。弱々しい響きは今にも途絶えそうに思え、彼は身を擦った。湯船からは新たに湯が漏れ、また排水溝へと消えて行く。

ぬくもりが、いよいよ体を支配していく。彼はいつまでもこうしていたかった。足先は今や平生と変わらぬほどまで回復しており、寒さを覚えている箇所は体中どこにもない。彼岸に佇む寒さを眺める心地に漂いながら、彼は穏やかに瞼を開く。湯気に満ちた浴室にはやけに黄色く染まった光が満ちている。

鏡のような水面が、静寂を映し込んでいた。無音がとぐるを巻いて彼を締め上げる。

浴槽の淵に手を置き、勢いをつけて立ち上がると大きな音を立てて水鏡は割れた。意に介すこともなく彼は濡れた肢体を厭うように浴室から出、体を拭いた。垂れた湯が板張りの床に広がる事さえも視野に収めず、ただ立ち上る湯気を睨みつつ、独り黙々として体中の滴を拭き取るのみである。

彼はただ恐怖しているのであった。

半乾きの髪のまま急ぎ立てられるように彼は脱衣所を後にする。湯冷めという言葉が頭をよぎることもない。廊下を満たす底冷えした空気が頬を撫でて、いまだ熱気がまとわりつく体ではそれに気づくこともない。彼の早足に階段は軋み、重く響く音を立てた。

部屋に入り、鍵を閉める。いつも通りの行動をしたため息をついてから、そういえば今日はまだ飯を食っていないと彼は気が付いた。時計を手に取って見ればもう十四時を回っている。気づいてしまったことで蠢きだした腹の虫を静めようと、仕様なく棚上の鍋を手にもた部屋を出る。

風呂場のすぐ隣にある焔炉の上に、水を張った鍋を置く。瓦斯の元栓を開けて着火する。

そこで彼は初めて自分が何を作るか決めていないことを、またそ

のながしかをここまで持つてきていないことも気づく。まだ寝ぼけているのかも知れない。湿った髪の上から頭を搔くと、わずかな逡巡を以て火をそのままにし、部屋に戻る。

何か食う物はと食料を入れた棚を見ると、蕎麦が二束ばかり残っているのが見えた。大晦日にはちよどいいとばかりに一束を手に取り。もう一束は夜にでも食おうと思いつながら、火をつけたままにした焔炉のことを思い出して急いで戻る。

青い炎はちらちらと先を赤く染め、微かに空気の漏れるような音を立てて燃えていた。鍋の中の水を覗き込むが、まだ底面に小さな気泡が天道虫の卵のように密集しているだけであつたので、彼はそれを一つ一つ箸を使ってつぶした。

この場にはいくら窓を開けたところで陽光が当たらないため、昼間でも照明をつけることになる。その黄色い明かりが満ちており、鍋や焔炉に彼の影を落としていた。黄と黒の境目が、彼の影の輪郭をなぞっている。身じろぎ一つせず、じつとそこにある影を眺めていた彼は、まるでそれが自分のものでないような気がして思わず身を振るわせた。とうに忘れてしまっていた寒さが回帰したような心地がし、続いて曖昧な輪郭がぶれて見えた。黄と黒は銀とも灰とも取れる壁に浮かびあがり、きめ細やかに描かれた絵画のような曖昧さを呈して、そこにあつた。

湯が沸いた。彼はぼこぼここと大きくなつた気泡を眺めながら蕎麦を括つてあつた紙を破り、乱雑に束を鍋に放る。固い一本一本が湯に接した部分から溶けるように形を崩していく。彼にはそれが酒に倒れ行く同窓生のごとく見えた。そう思つたころには箸で鍋をかき回していた。

湯の沸く音と瓦斯焔炉の音は、彼の頭をゆっくりと溶かしていく。呆然と眺める鍋の底には先刻見たばかりの無音のとぐるが無数にあつた。その一匹一匹が口を開き、牙をむきつつ彼を威嚇している。その頭を箸で潰して回すと、白い血が泡のように舞つた。彼はただ微笑むばかりだつた。

三分が経った。彼は茹で上がった蕎麦を流しで洗い、再び鍋に放り込むと部屋に戻った。そして棚に置いてあったそばつゆを掛け、鍋から器に移すこともなく食った。箸も同じものだ。作るのに要した時間の半分もかけずに、鍋は空になった。

昼飯を終えて時計を見ると十三時半を指している。

もうすることはなくなっていた。大掃除は二十九日に済ませたので部屋も綺麗なままである。外に出ようとも思ったが、なにせ今日は今冬一番の冷え込みだ。一瞬だけ考えて浮かしかけた腰をまた床に下ろした。

万年床の布団に足を納めて仰向けになった。少し黄ばんでいるらしい天井を眺めながら、彼は手持無沙汰に布団の周辺を探った。

すぐに右手に触れたのは先日大掃除のための用具を買いに出かけた際に買った文庫本だった。著者は彼のよく知っている作家で、少し前に読んだと言う友人に勧められていたものだ。書店で発見した時は胸が躍る気持ちになり、まだ部屋にはいくらでも読んでいないものがあると言うのに、残り少ない財布の中の紙幣を以て購入した。帰り道もこれからする掃除のことなどすっかりと忘れて、自室で読むことが楽しみでならなかった。

しかし、いまだ読了していない。

自室に戻ってしまえば大掃除と言う本来の目的を思い出し、それを数時間かけて終わらせた。そうして思い返した頃に表紙をめくり、一頁目に目をやった。

数分後、彼は机上で頭を抱えていた。

自分が理解できなかったのだ。いつから自分はそうなってしまったのか。彼には到底、理解が及ばなかった。自分が自分でなくなっていくかの焦燥感に駆られ、ひっ迫した状況に追い込まれていくここにいる自分はいったい誰なのか。少なくとも自分じゃない。彼はちらと隣に置いた文庫本に目をやる。

彼は、本を閉じたのだ。

童心に返ったように、まるで自分が欲しくてたまらなかったもの

が目の前にあると言うほどに、先刻までの彼の胸は高鳴っていた。貪るようにして一頁目を読んだ。思い込みのせいかは知らぬが、非常に興味深い内容がこれから綴られそうだった。彼がこれまでに愛してきた作家の綴る物語を、その断片を確かに感じ、割れんばかりの鼓動の音を耳にしながら手にかけて次の頁を繰ろうとしたところで

彼は、本を閉じたのだ。

数秒後に我に返りその行為に気づいた彼は、また一頁目を開いた。一度消してしまつた残像をもう一度覚えようと思つたからである。やはり、内容は変わらない。一字一句彼が先刻読んだものに相違ない。さて、続きは

彼は自分が自分ではないような気がした。自分が理解できなかつた。自分の感情が津波の如き勢いで彼を覆い尽くし、その存在をあらかた消し去つてしまつたのだ。

或いは別にも思えた。自分の感情以上の高次存在が自分の感情を消し去つてしまつた。そして都合の悪いことに、余計な感情を付随させていった。

彼にとって、この感情と行動に生じた齟齬は非常に大きなものであつた。口で右と言つて指で左を指すようなものである。自分の存在が根底から怪しいものへと変質してしまつた。自分は何を見、何を感じ生きてきたのか。幼少の頃からの自分を懐疑的な目で見ざるを得なくなつた。自分の存在こそ世界を語るものだと、そしてその逆もしかりであると彼は強く思い込んでいた。それなのに、自分の存在さえ満足に測れていないことを知らされてしまつたのだ。

再び現在へと意識を戻した彼は、ぱらぱらと頁をめくつてみてから中に目を通さずに、布団にいては手の届かないところまで投げやつた。もう表紙さえ見たくなかつた。何らかの思い違いだと思つたかつた。もう少し時間が経つて、何かしら落ち着いてからにしよう。何かしら、の部分が何かは、彼には判然としない。

自分の環境なのか、心境なのか。好みの移ろいということも考え

られる。なんにせよ、今は駄目なのだと強く言い聞かせた。

天井を仰ぎ、瞳を閉じた。途端に視界は闇に染まり、限りなく彼自身に近い存在が見える。

暗く、黒いものが視界に広がる闇の中でごそごそと動いている。彼はじつとそれを見てみると、それは視線に気づいたかのように、しかしその様を彼に悟られぬように位置を変える。彼はまた別の場所へと視線を送ってそれを見つける

幼い頃からの癖だった。おかげで眼球は閉じた瞼の裏でぐりぐりと動き、その動きに合わせ、眉間が、こめかみが、耳が、小刻みに動くのがわかる。それはどうにも彼にとってはわずらわしいものであった。

しばらくそうこうしていると、ふと寝たままの姿勢でいることに違和感を覚えた。今日で今年は終わってしまうのだ。そう起き抜けの自分に言い聞かせてからまだ二時間と過ぎてはいない。

普段と同じことをしている自分の姿が、この時ばかりは滑稽に思えてしまった。そして同時に、現状を思い起こす。

彼はわざとらしく音を立てながら立ち上げると、椅子に掛けていた上着を羽織って部屋から出た。ただ先ほどまでと異なるのは扉に鍵をかけたことだ。彼の頭の中には寒さのことなどもはや一切存在せず、あるのは静寂から逃避すること、ただそれだけであった。

玄関へと転がるように駆け下り、靴を引掛けるようにして下宿から出る。当然積もっている雪がそのまま靴の中へ入り、履きなおした後から溶けて靴下を濡らした。冷たさも痛みはない。例えるなら静かになっていくような気がした。

まるで静寂が彼の足をつかんだような。

ぞつとしてから、辺りを見回した。人はいない。この周辺は大学に近いせいで学生が多い。全員と言っわけではないだろうが大多数が帰省しているだろう。道を歩く者はおらず、足跡さえ二つ三つしかない。もう昼を回ったと言っのにこれだけの人数しか出歩いていないのは不自然すぎる気もしたが、彼は気にしないことにした。ど

うせ雪が降って足跡が消えたのだろう、とそう思った。

着込んだ上着のおかげで熱は逃げない。こればかりは非常に助かった。

はらはらと雪が降っている。手袋をつけた手で触れてもなかなか溶けることはなく、手のひらのなかでさらさらと流れる。彼の地元の雪とは全く異なっており、初め彼はこれが雪というよりも砂のように思えた。

雪が音を吸っているように、室内以上に音がない。この辺りには車道とも歩道ともつかない道が一本伸びているだけであり、車の通りが多い国道からは随分と外れているのだ。彼はその道に沿って歩いた。特に目的地はなかった。

早々と傾き始めた太陽は空を青から橙に染めつつあり、雪道はそんな日差しを強く照り返す。目が利かなくなってしまうほどの白さは毒にも似ている。彼は足元に落とした視線を時々さつとそらしながら、自分の雪を踏む音ばかりを聴いて歩いた。柔らかく積もった雪の下には何日もかけてできた強固な氷があり、このせいで時折積雪の浅いところでは足を取られそうになった。冬を前にして雪靴を新調した彼であったが、靴底の溝はその意味をなしていないように、思わず舌打ちをする。

彼自身、それは自分に理由があることくらいはわかっていた。冬季休業に入ってからと言うもの、ごみ出しくらいの理由でしか外出しなかったせいだ。体中さまざま部位が軋んだ。

雪の上を歩くのは思いのほか体力を奪われるものだ、と彼はわかっていたが、足をなかなか止めることはなかった。帰りのことなど全く考えていないような足取りで、足が埋もれて行くのも気にせず、に歩き続ける。

しばらく歩くと公園が見えた。一本道の左手に沿った公園は野球場ほどの面積を有している。普段ならば一面に生えた芝生の青々とした色が見えるのだが、今は雪が積もっており窺えない。

彼はそこで、しばし息を飲む。

雪の海が公園中に広がっている。処女雪は公園の中央では穏やかな様相を呈し、端に行くにつれて侵入者を拒むがごとく荒れ狂っていた。やや赤みを孕んだ真白な海に浮かぶ木々は彼の背丈ほどでありながらも高く歪に聳える塔にも見える。できた影は重く、海面に横たわっている。

彼はひどく現実感が欠如していく心地がした。同時に、簡単に足を踏み入れてはいけない場所であると直感が伝えた。あたかも神域のような清澄さで、見ているだけできりきりと胃が痛んだ。過去に胃の痛みなど覚えた事のない彼は、その痛みがどこから来るものか判ずることはできない。ただ腹が痛む、と思いつつ、海からは目を切った。それでもしなければ飲み込まれてしまいそうな気がしたのだ。

いつの間にか踏み出しかけていた足を道へ戻し、公園を左側に見ながら歩く。こちらから道は下り坂になっており、今まで以上に気を払わなければ完全に足を滑らせてしまう。

少し歩くとまた平坦な道になり、右手には林と道路を挟んで白樺の木が立ち並び始め、左手には池が見えた。池の水面はもはや完全に凍ってしまったっており、その上に雪が降り積もってみる。よく目を凝らしてみれば誰かが歩いた跡が見え、彼は身がすくむ思いがした。たとえ凍っているとはいえ、池の上を歩くなど正気の沙汰ではない。彼は無意識に地元と比較している自分がいることを知っていたが、十数年と繰り返された刷り込みを破るに一年は短すぎる。それに実質はこの地を踏んで七か月余りである上、冬を経験し始めたのもほんのひと月ほど前だ。無理からぬことでもある。

池を囲んでいた歩道も傍にあつた長椅子も雪に埋もれてしまっている。取り囲む柳の枝が雪の重みで普段より垂れて、どこからが枝なのかもわからない。よく見れば池には立ち入り禁止の柵が張つてあつた。わざわざ越えるものでもないだろうに　と彼は眉をひそめた。

視線を正面に戻すと、右手の白樺がちらと視界に飛び込んだ。等

間隔に、しかも真っ直ぐと伸びて並んでいるさまは美しくも見えたが、ひどく人工的にも見えた。幹の色に慣れないせいで、彼はいまだにこれが木であることを心から信用できないでいる。黒の布地に真っ白な顔料を乱雑に塗りたくって巻きつけたような幹に、およそ彼の知る自然はない。作り物然とした配色に不動を思わせる佇まい。そして等間隔。自分はこれに似た何かを知っている。

そう、電柱だ　と、彼ははたと気づいた。

ではこれは何の目的で作られたのだろう。電柱には電話線や電力供給のためという役割が規定されている。ではこの白樺の木は何のために作られたのだろうか。やはり見てくれ通り芸術的役割を担っているのだろうか　と、彼は冗談半分で考えていた。

じっと見つめっていると、不気味さが湧いた。

先刻の海とはまるで違う。もつと異質で、無理矢理に押し込めたような静謐さが雪崩のごとき勢力で彼に襲いかかる。神聖さなどまるでなく、あるのはただ取ってつけたような美しさと純真さだけだった。いつの間にか勝手に歩みよろうとしていた足を彼は必死に自制する。白い幹は背景と同じ色にも関わらず異様なまでに蠱惑的に輝いて見え、怖気さえ走りそうになる。

す、と彼は思わず息を吸った。

空気が凍っている　と、瞬間彼は思った。肌に触れる冷やかな感触は固体のように肌に密着して動きを封じている。深海のような静けさは耳鳴りを呼び、彼岸より何かかやってくるような胸のざわめきと、足音にも似た枝のこすれる音が乱暴に彼の皮膚をひつかいた。皮一枚を隔てたそこから視線を覚え、背を撫でた風に冷えた白い指先を覚える。指先は白樺の幹のごとき純白さで

その時、彼の背後で轟音と共に一台の車が通った。

平時なら大した音でないはずが、この時ばかりは何かの爆発のように大気を切り裂いた。彼はその車体を認めることはできず、雪を跳ね飛ばしながら通り過ぎたその存在に気づくまで数十秒も要した。やっと頭が理解して振り返った頃には車など一切見えず、ただ

雪上に轍が残っているだけであつた。

ゆつくりと正面に向き直る。白樺の木はただの木として彼の瞳に写つた。枝に積もつた雪も、剥がれそうになつている樹皮も、単なる木の付属品にしか見えなくなつていた。先ほどまでの妖艶さもなりを潜めている。

彼は震える手で幹を触れた。がさがさとした手触り。少しの突起にも外気のせいで痛みを覚え、手のひらを強く押し付けることもできない。

顔を左にやると並木を構成する他の木が目に入った。しかしそれらも彼の触れる一本と変わりはない。先刻は直立して見えたそれらだが、実際は彼の見る角度が問題だつたのか、それぞれ異なつた傾き方や幹のねじれ方をしていた。また顔を右にやってみても変わりはない。そこにはただの白樺の木が偶然並んでいるようにしか見えなかつた。

再び目線を正面にしてから、彼は肩を落として深くため息を吐いた。本当に自分がどうかしてしまつたのだとしか彼には考えられなかつた。とうとう寒さにやられてしまつたのかもしれないと思うと真つ先に部屋に帰りたくなつた。意味もなく出歩くにこの土地は向かない。たとい大晦日であろうと布団の中で怠惰に一日を過ごしても構わないはずであり、しかもその一日も既に半分は過ぎていく。いくらかかしなければいけないと思つていても、このまま無為に歩き続けても風邪を引くのが仕舞だ。彼は踵を返し、下宿を屈指した。後ろから視線を覚えた気がしたが、振り返ることはしなかつた。復路は往路よりも長く感じるものである。緩やかな坂を上りきつて平坦な道になつても、なぜか坂を上り続けているような心地がして彼はそう思つた。彼自身雪道に慣れていないというのも原因の一つに挙げられるが、もっと精神的な部分でつらさを覚えている気がした。徐々に道が壁のごとくせり上がつてきていると思つてしまふほど彼には堪えている。いつまでも自分が歩き続けている光景が鮮明に脳裏に浮かび、ひやひやとしながら一層足を速めて下宿を屈指

した。日はすっかりと落ちて辺りは寒さが主導権を握りつつある。

下宿の屋根が見えたときの彼の安堵感は平生では計り知れないものであったが、数瞬後にはそこに誰も存在しないことを思い出して彼は大きく肩を落としそうになった。もちろん隣接している家に大家は住んでおり、今もおそらく在宅であろう。だが、それは彼に全く関係のないことであった。

特段、彼は下宿の面々と交流があるわけではない。現在の住人は全て彼と同じ大学に通う者たちであるが、かろうじて会話を交わすのも同学年の中でも一人二人だ。それ以外の者とは大した話もしない。まして先輩ともなれば会話はおろか廊下ですれ違っても挨拶をしないことさえある。彼はしなければならぬと思っっているのだが、無意識のうちに出かかった言葉を嚙下し、下げかけた頭を偶然俯いたような形にしてしまい　つまり、どうしても先輩の存在に気づきながらも気づいてないふりをしてしまうのだ。それは治そうと思いながらも十年近く治らない彼の癖であると共に、彼が自己嫌悪に走る際の最も多い理由となっている。

彼はその癖を治したいと思っている。しかし、実際は逃避しかしていない。

問題を改善するのではなく、問題を起こさないようにしているのだ。そもそも先輩と廊下で会うことがなければ、このようなことで自己嫌悪しなくてすむ　彼は自分の愚行に気づきながらもそう思っている。

玄関の扉を開けて中に入れば、外気とは一転した暖かな空気が彼を包んだ。彼がこの土地に引っ越してから知ったことだが、どこへ行っても室内温度は平均的に高い。そのため布団にくるまりさえすれば耐えられない寒さではなくなり、他の部屋の者は暖房を入れてあるそうだが、彼はいまだ入れたことがなかった。特に意地を張っているわけではない。彼が単に暖房が嫌いだけだった。

廊下を数歩歩いたところで、空気が違う、と彼は思った。それこそ彼の嫌う暖房が作り出す空気だった。

人がいる場所では多少なりとも人間のおいが空気に染み付く。その人間が纏う香水のおい、着ている服のおい、やや脂の混じった鼻にまとわりつくにおい。人間がいれば必ず存在するにおいがそこにある。

しかし、この場にはそれが異様に少なかった。人が行動しないことで暖房は単なる空気の循環へと変わり、残っていた人のおいを消し去ってしまった。誰もいないという状況は空気を媒介に実在するものして彼に知らされているのだ。これには彼も眉をひそめ、おいを嗅がないように呼吸を止めながら足早に自室へと戻った。

鍵を閉め上着も脱がずに布団の上に横になる。闇の中、瞳の先には天井と同じように少し黄ばんだ壁が見えた。家具を動かす際に引っ掛けたのか削れたような跡もある。気づいたところでどうすることも無いが、彼はなんとなしに手を伸ばそうとした。だが、あと数寸で届かないことを悟って手を引っ込めた。もはや意味のない行動はしたくなかった。横目にした時計の短針は十七時過ぎを指している。ただこのまま時間だけが過ぎてしまえばいいと彼は思っていた。そして、彼は眠った。僅か一時間ばかりの散歩が奪った体力は彼に数時間の睡眠を与えた。

眠りの中で、彼は夢とも思えぬものを見た。あまりに漠然とし過ぎた光景は粘土のごとき柔軟さで変形し、切れかけの街灯のように明滅し、油の滑らかさを以て彼の手を滑り落ちた。目まぐるしく巡る光景に目をしばたかせるうちに、彼は深く沈んでいく体を感じた。やがて自分でも気づかないほど緩やかな速度で落下していく。そのうちに今度は上昇を始め、またしばらくして再び降下を始めた。まるで世界が脈動しているかのごとく彼は感じ、それに伴って自分の位置も移動しているので安定しているのだと思った。

彼にはこれが夢でないような気がした。確かに夢心地ではあるが、どこか現実の感覚に近い。世界に目を向けずに自分に限るなら、彼は間違いなくここは現実だと言い張るだろう。

不意に足場がなくなつて宙に放り出される感覚もまた、現実と相

違なかつた。

目を覚ますと、黒に染まつた天井が彼を迎えた。彼には既に夢の記憶はない。電気もつけずに眠っていたので、完全に日が落ちてしまった今ではもう室内の状況を窺うことも満足にできない。彼は昼間にもやつたように頭を掻きながら起きると、頭上にぶら下がっていた電灯に続く紐を引つ張つた。火花が散るような音が何度かしてようやく部屋が明るくなる。時計は二十三時を指していた。

彼はため息を吐いた。腹も一つぐうと鳴つた。緩慢に立ち上がり、鍋と蕎麦を一束手につかみ部屋を出る。

昼間と同じ手順で蕎麦を湯で終えると、流しで冷やすことなく部屋に戻つた。そして熱湯の中にそばつゆを目分量で入れる。適度に箸でかき混ぜてから、いまだ熱を帯びた鍋に注意しながら彼はそれを食つた。今度は作るのに要した倍ほどの時間がかかつた。

乱暴に鍋を放り時計を見ても、針は変わらずに二十三時を指していた。秒針も動いていないことからどうやら電池が切れてしまったようだ。もしかすると既に年は越えてしまったのかもしれない。

ずっとこのままならいい、と彼は思う。結局事態は何一つとして変わっていないかつた。何かしようと思ひ込んだ大晦日も、何もしいままに過ぎてしまおうとしていた。ならばいつそのまま変化のない時間が過ぎればいい。一人きりの年越しなど、孤独など、この際ずっと続いてしまえばいい。

忘れていた静寂が押し寄せた。

構わない、とばかりに彼は布団へ潜り込んだ。耳が痛くなるほどの静寂に部屋が満たされようと耳を塞ぐこともなく、ただそれに耳を澄ます。就寝前のいつも通りの行為。他に誰もいなくなるうと関係がなかつた。

おもむろに、昼間白樺の前で覚えた感覚が室内へ広がって行く。外側から来るものではなく、まるで彼から溢れ出しているように。息を吐くごとに部屋は冷え切つて行く。閉ざされた部屋は逃げ場のない箱で、彼は自分が捕らえられた虫のように感じた。

耳鳴りがやまない。そしていくらそれに耳を澄ませようと、眠れない。

当然のことだった。つい先ほどまで数時間寝ていたのだ。そうやすやすと眠ることはできない。加えて今日彼が初めて目を覚ましたのも昼過ぎなのだから、合計した睡眠時間は平時の彼よりいくらか多くなっていることだろう。

彼は必死に目を閉じた。指で引つ張つても開かないほどに固く。瞼の裏の闇が断続的に彼を襲い、不定形な光がねばねばと視界を横切る。色彩は赤や黄や白に絶え間なく流転し、幾筋も残像を残していく。光と闇が押し寄せることに耳鳴りは共鳴し、脳髓を揺さぶられる心地に彼は頭を抱え、布団の中で胎児のごとく身を丸める。

過ぎ去ってしまった、と彼は強く念じた。先ほどまでの自分のことなど露も気にかげず、思わず口に出そうとまでしていた。誰もいない空間、無機質なおい、軋まない廊下、聞こえない喧騒、止まない耳鳴り。それら全てに彼は恐れをなし、ただ耐える事しかできないでいた。

彼の奥歯はがちがちと鳴った。もはや耳鳴りは消えなかった。静寂の箱の外から覚える視線は体中を舐めまわしている。閉じた瞼の向こうにある何かを、闇を挟んでいようと彼は直視できなかつた。見えない限り自分の思ったものが現れてしまう。自分のことがわからない以上、何が覚えてしまうかもわからない。本当は何もいないのだとわかっていようと、己の内で加速していく恐怖心を押さえつけることはできず、彼はうつづせになりながらさらに瞼をきつく締める。

耳鳴りに割れてしまいそうなほど頭が痛んだ。彼はただ不安になつていった。平生ならむしろ一人でありたがる性分であるというに、そのようなことなど委細忘れ、誰かを求めていた。

「ごうん、と箱が揺れた。」

音は空気を切り裂くでもなく、じわじわと部屋に満ちる。室内の冷気が温かみを帯びた気がし、彼は何事かとうっすらと目を開ける。

と、再びごうんと遠くから音が響いた。

静謐が碎かれていった。

ひっそりと、彼の周りに音が満ちて行く。鐘は一定の間隔で打ち鳴らされ、その音は冬の空に霧散して月光に輝いていることだろう。重く腹の底を震わすような音を聴きながら、彼は穏やかな心地へと足を踏み入れた。心境の波紋と鐘の音は打ち消しあい、彼の内に静謐を作りだす。そうして出来上がった水鏡を眺め、彼は思う。自分とはこのようなものだったのか。鼻先に触れる空気、いつの間にもやら吹き始めた風の立てる音、一人だけの部屋、一人きりの下宿。有りのままを見た今となって、彼が臆するものはなかった。

そして、彼は静かに目を閉じる。

耳鳴りはもう、しなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5087ba/>

静謐の彼方より

2012年1月14日00時54分発行